

『村』における愛の主題

石川和代

The Theme of Love in *The Hamlet*

Kazuyo ISHIKAWA

I

『村』 (*The Hamlet*, 1940) は、William Faulkner の 11 番目の長編小説であり、「フレム」 (“Flem”), 「ユーラ」 (“Eula”), 「長い夏」 (“The Long Summer”), 「百姓たち」 (“The Peasants”) という 4 章から成り立っている。Olga Vickery はこの作品について、“... the meaning of the book is established not by the plot but in and through the successive tales of barter and stories of love.”¹⁾ と述べているが、愛に関する主題は、この作品の中で大きな位置をしめていると思われる。Faulkner は 1939 年に出版された『野性の棕櫚』 (*The Wild Palms*) において、はじめて愛の問題を真正面から取り扱ったと言われているが、翌年の 1940 年に出版された『村』においてもまた続いて愛の主題を扱ったのであろう。この主題が描かれているのは主に第 2 章「ユーラ」と第 3 章「長い夏」においてであり、第 2 章では、ユーラとラボーヴ (Labove), ユーラとマッキヤロン (McCarron) の関係の中に描かれ、第 3 章では、白痴のアイク・スノープス (Ike Snopes) と牝牛の愛、ジャック・ヒューストン (Jack Houston) 夫妻の愛、ミンク・スノープス (Mink Snopes) 夫妻の愛という形で描かれている。この小論では、ユーラをめぐる愛及びアイクと牝牛の愛に目を向けた後、ジャック・ヒューストン夫妻やミンク・スノープス夫妻の愛にもふれるという形で、愛の主題を考察してみたいと思う。

II

第 2 章の冒頭から、作者はユーラの豊かな肉体を、きわめて象徴的な表現によって巧みに描写している：

Now, though not yet thirteen years old, she was already bigger than most grown women and even her breasts were no longer the little, hard, fiercely-pointed cones of puberty or even maidenhood. On the contrary, her entire appearance suggested some symbology out of the old Dionysic times — honey in sunlight and bursting grapes, the writhen bleeding of the crushed fecundated vine beneath the hard rapacious trampling goat-hoof. She seemed to be not a living integer of her contemporary scene, but rather to exist in a teeming vacuum in which her days followed one another as though behind sound-proof glass, where she seemed to listen in sullen bemusement, with a weary wisdom heired of all mammalian maturity, to the enlarging of her own organs.²⁾

13才にもならないのに、大人の女性よりも大きな体つきをしたユーラは、子供の頃から動くことが嫌いで、歩くようになるのも遅く、乳母車に乗れないほど大きくなってからは、椅子に座ってばかりいる女の子であった。ユーラが8才になると、兄のジョーディー (Jody) が彼女を馬に乗せて学校へ行くようになるが、彼が馬を速駆けさせる時、椅子に座っている時も動かない彼女の体全体が“jigging its component boneless curves against his back” (p. 100)しているのを彼は感じる。ユーラが男性を魅惑する力について、“She’s just like a dog! Soon as she passes anything in long pants she begins to give off something. You can smell it! You can smell it ten feet away!” (p. 99)と兄が母親に言うのは滑稽である。兄はある日、ユーラが馬にまたがって行くのをやめさせようと思う。それはなぜかといえば、ユーラを馬の背に乗せている兄が後を見た時、“the incredible length of outrageously curved dangling leg and the bare section of thigh between dress and stocking-top looking as gigantically and profoundly naked as the dome of an observatory” (p. 101)が見えたからであり、ユーラがわざとむき出しにしているのではなく、むき出しになっていることさえ彼女は知らないということが、兄にはわかっていたのである。

ユーラの通っていた学校の教師はラボーヴという男性で、ユーラの父親が見つけて来た人物であった。彼は『野性の棕櫚』のハリー・ウィルボーン (Harry Wilbourne) と同じような苦学生で、フレンチマンズ・ベンドの学校で平日は教え、週末には、馬でオックスフォードまで走り、大学の講義に出て、フットボールの試合をやり、日曜日の真夜中には、フレンチマンズ・ベンドの学校の近くの未亡人の家敷の中にある小屋にもどるという生活をしてきた。大学では法律の勉強をしており、所有物はわずかな洋服の他に法律書と明るいランプくらいのもので、大変質素であり、顔つきはといえば、昔の修道士を思わせる顔であり、“his own fierce and unappeasable natural appetites”に駆られている“a militant fanatic” (p. 105)の顔であった。

ラボーヴが初めてユーラを見たとき、“a face eight years old and a body of fourteen with the female shape of twenty”が彼の目にとまるが、彼は彼女が敷居をまたいだ瞬間に、教室の中に“a moist blast of spring’s liquorish corruption, a pagan triumphal prostration before the supreme primal uterus” (pp. 113-114)を持ち込んで来たと感じる。彼女は学校で勉強することはせず、「わかりません」とか「そこまではやっていません」とか答えるのであるが、ラボーヴは一目彼女を見るなり、“there was nothing in books here or anywhere else that she would ever need to know, who had been born already completely equipped not only to face and combat but to overcome anything the future could invent to meet her with” (p. 114)であることを見て取るのである。

ユーラが机の間の通路を歩くだけで、彼女は“transform the very wooden desks and benches themselves into a grove of Venus” (p. 114)し、思春期に入ったばかりの男の子たちから、19才とか20才の大人に至る教室の男たちの全てを魅惑する。また、彼女はクラスにおいて、女王蜂のような存在である：

It would have but one point, like a swarm of bees, and she would be that point, that center, swarmed over and importuned yet serene and intact and apparently even oblivious, tranquilly abrogating the whole long sum of human thinking and suffering which is called knowledge, education, wisdom at once supremely unchaste and inviolable: the queen, the matrix. (p. 115)

こういった状況を考えると、Sally R. Page の、“Eula symbolizes the creativity and productivity of life, and man cannot resist her magnetic power.”³⁾ との指摘は的を得ていると言える。

ラボーヴは大学を卒業するまでの学費かせぎのアルバイトとして、フレンチマンズ・ベンドの学校で教えていたのだが、大学の卒業式も終え、自分がそれまで目ざして来た世界へ今一步というところへ来て、彼にはそれが出来ず、フレンチマンズ・ベンドの学校へ再びもどって来る。初めてユーラが学校へ来た日から、ユーラの魅力のとりこになってしまったために、彼は大学卒業後もユーラのいる学校へもどって来るのである：

He must return, drawn back into the radius and impact of an eleven-year-old girl who, even while sitting with veiled eyes against the sun like a cat on the schoolhouse steps at recess and eating cold potato, postulated that ungirdled quality of the very goddesses in his Homer and Thucydides: of being at once corrupt and immaculate, at once virgins and the mothers of warriors and of grown men. (p. 113)

Cleanth Brooks も、“Eula is a woman of fabulous beauty and seductive power, though unself-conscious and almost unaware of that power. She becomes the archetypal feminine—at least in the eyes of the young fanatic Labove . . .”⁴⁾ と述べているように、ラボーヴは女性の原型とも言うべきユーラの美しさとその魅力にとりつかれてしまったのであろう。

大学卒業後ユーラのいる学校へもどったラボーヴが、そこであと3年間教えた頃には、彼の生活はまるで修道士のような生活になっている。そして荒れ果てた校舎と村は、“his mountain, his Gethsemane”であり、“his Golgotha” (p. 118)なのである。彼はユーラが欲しいと思うが、彼の欲望は正常なものではなく、obsessiveなものである：

He had long since thought of marrying her, waiting until she was old enough and asking for her in marriage, attempting to, and had discarded that. In the first place, he did not want a wife at all, certainly not yet and probably not ever. And he did not want her as a wife, he just wanted her one time as a man with a gangrened hand or foot thirsts after the axe-stroke which will leave him comparatively whole again. (p. 118)

ある日の午後、ラボーヴは兄の迎えを待っているユーラを強姦しようとするのであるが、ユーラは全く恐がる様子も見せないし、彼を避けようもしない。やがてユーラの肉体が無言の抵抗を始めるが、それは怖れでも怒りでもなく、驚きと困惑といったものである。ユーラと激しくもみ合うラボーヴがユーラに言う言葉もまた、彼の欲望が正常なものではなく、obsessiveなものであることを表わしている：

“Fight it. Fight it. That’s what it is: a man and a woman fighting each other. The hasting. To kill, only to do it in such a way that the other will have to know forever afterward he or she is dead. Not even to lie quiet dead because forever afterward there will have to be two in that grave and those two can never again lie quiet anywhere together and neither can ever lie anywhere alone and be quiet until he or she is dead.” (p. 121)

まさに、Cleanth Brooksが、“It is Labove’s fate to fall in love with Eula Varner. ‘Love,’ of course, is not the proper term. His is a special kind of lust, a lust in the head as well as in the glands, and it is perverse and obsessive.”⁵⁾と述べている通りである。

強姦しようとするラボーヴに対して、ユーラは一撃を加え、取り乱しもせずに、“Stop pawing me”と言い、続いて“You old headless horseman Ichabod Crane.”(p. 122)と言って立ち去って行く。自分がユーラを強姦しようとしたことは当然ユーラの兄に知られていると考えるラボーヴは、いさぎよくその報いを受けようとヴァーナー (Varner) の店に出かけて行くが、兄がそのことを全く知らないらしいということを知り、彼は“Yes. I see. She never told him at all. She didn’t even forgot to. She doesn’t even know anything happened that was worth mentioning.”(p. 126)と思い、学校にもどって鍵をかけ、町から去って行くのである。先に Sally R. Page の意見を引用したように、ユーラは“creativity and productivity of life”の象徴であるが故に、彼女にとって、男に強姦されそうになったことなど大したことではなかったのかもしれない。

ユーラが14才の年の春と夏の間、かって同じ学校の生徒だった15才から17才の若者たちと、同窓でない他の若者たちが、“swarmed like wasps about the ripe peach which her full damp mouth resembled”(p. 127)し、彼女はいつもその取り巻きの中心である。両親と一緒にジェファソンで開かれた郡全体の市に出かけた時の彼女は、何か食べながら一日中動いて回ったり、“her long Olympian legs revealed halfway to the thigh astride the wooden horses of merry-go-rounds”(p. 129)して、いつも食物を口に入れて、降りもせず何回も乗っていたりするのである。彼女が15才になった時には、男の子たちはもう大人になり、当時の田舎では結婚を考えてもよい年頃になっている。若者たちはユーラの家のパランダに座り込んで、ユーラの気を引こうと一生懸命になるが、彼女は何の反応も示さない。その時の彼女は、“simply too much dressed in the clothing of childhood, like a slumberer washed out of Paradise by a night flood and discovered by chance passers and covered hurriedly with the first garment to hand, still sleeping”(p. 131)であり、軽装馬車でマッキヤロンとデートをするようになった彼女は、“not like a girl of sixteen dressed like twenty, but a woman of thirty dressed in the garments of her sixteen-year-old sister”(pp. 131-132)に見える。マッキヤロンと二人だけで馬車の中にいるところを他の若者たちに襲われた時、後で若者の一人が“it was the girl who had wielded it, springing from the buggy and with the reversed whip beating three of them back”(pp. 137-138)であったと言うように、ユーラはマッキヤロンを守ろうと馬車からとび出し、鞭の握り棒で若者たちを殴る。このあと二人がユーラの家にもどり、マッキヤロンのけがの手当てをした後で、ユーラとマッキヤロンは交わり合い、ユーラは妊娠するのである。その後マッキヤロンとあと二人の若者は町から姿を消してしまう。こうして見てみると、少なくともユーラはマッキヤロンを守ろうとして、他の若者たちに殴りかかったのに対して、マッキヤロンはユーラに子供ができたことを知って姿を消すのであるから、マッキヤロンはユーラに対して肉体的欲望を抱いたのみであり、本当の愛情を抱いていたとは言い難い。

ユーラを中心にして、ラボーヴとの関係、マッキヤロンとの関係を見て来たわけであるが、ラボーヴもマッキヤロンも、ユーラの魅力にとりつかれて、ユーラに対して肉体的欲望は抱いたものの、ラボーヴの場合は obsessive な欲望、マッキヤロンの場合は自分勝手な肉体的欲望であり、どちらの場合も、そこには純粋な本当の愛はなかったと言えるであろう。

III

第3章の途中から白痴のアイクとヒューストンの所の牝牛の愛が描かれるが、きわめて詩的にまた象徴的に描かれており、その世界は牧歌的な雰囲気を持っている。アイクは夜明けに小川のほとりのもやの中へ行き、草の中に寝そべって、牝牛がやって来るのを待ち、足音が聞こえて来ると喜びに浸る：

Then he would hear her, coming down the creekside in the mist. It would not be after one hour, two hours, three ; the dawn would be empty, the moment and she would not be, then he would hear her and he would lie drenched in the wet grass, serene and one and indivisible in joy, listening to her approach. He would smell her ; the whole mist reeked with her ; the same malleate hands of mist which drew along his prone drenched flanks played her pearly barrel too and shaped them both somewhere in immediate time, already married. (p. 165)

アイクは牝牛に恋をしており、小川のほとりに牝牛がやって来ると、牝牛に触れようとするのだが、はじめのうちは、アイクの手が触れないうちに牝牛はさっと逃げ去ってしまい、彼は急いで追いかけながら牝牛に話しかける。追いかけて行くうちに、ヒューストンの家の牛小屋まで入って行くことになり、アイクがよだれをたらしながら牝牛に触っているところをヒューストンに見つかり、「出て行け」とどなられる。この時、白痴のアイクは自分の名前すら満足に言えず、アイク・スノーブスという名前であるのに、“Ike H-mope” (p.167)と言うのみである。このように自分の名前も言えないアイクであるが、牝牛を愛する心はとてと純粋であり、彼がひきとられているリトルジョン夫人 (Mrs. Littlejohn) の家で、ほうきを持って掃いている時でも、“he would still see her, blond among the purpling shadows of the pasture, not fixed amid the suppurant tender green but integer of spring's concentrated climax, by it crowned, garlanded”(p. 168)なのである。

ある時、アイクが2階で掃除をしていると、煙が見え、それは小川の向こうの丘からの煙であるわかる。それは3マイル先ではあっても、彼の目には牝牛が炎から後退りしているのが見え、大声で鳴いているのが聞こえるような気がする。彼はほうきを持ったまま走り出し、リトルジョン夫人に止められるが、泣きながら部屋にもどった後、ひそかに部屋を出て、煙の出ている丘の方へと向かう。目の前に立ちこめる煙の中にとび込み、牝牛のうめき声のする方へ向かうのであるが、その時の彼は、熱いのを我慢して、熱い大地の上をすばやく足を上げながらとびはねて行くのである。彼はさらに牝牛の声のする方へ走って行き、火の燃えている所まで到達し、牝牛を救い出そうとするのだが、斜面の土が崩れて、彼は牝牛の下敷きになる。その後の部分では、牝牛は恥じらいのある乙女のように描かれている：

At first he couldn't do anything with her at all. She scrambled to her feet, facing him, her head lowered, bellowing. When he moved toward her, she whirled and ran at the crumbling sheer of the slope, scrambling furiously at the vain and shifting sand as though in a blind paroxysm of shame, to escape not him alone but the very scene of the outrage of privacy where she had been sprung suddenly upon and without warning from the dark and betrayed and outraged by her own treacherous biological inheritance, he following again, speaking to

her, trying to tell her how this violent violation of her maiden's delicacy is no shame, since such is the very iron imperishable warp of the fabric of love. (p. 174)

アイクは牝牛の尻に肩を当てて押し上げてやるが、土が崩れて来て斜面を登ることができず、溝を伝って行くと小川に出る。彼は牝牛について水の中に入り、水を飲んでいる牝牛の脇腹に触るが、この時はもう牝牛も逃げ去ることはなく、“his hand has lain on her flank for a second or two before she lifts her dripping muzzle and looks back at him, once more maiden meditant, shame-free”(p. 175)といった具合で、まるで牝牛がアイクの気持に答えているようである。アイクは火事の煙を見た時に、牝牛を救うことのみ考えて、行動するのであり、アイクは牝牛のために、火の中へとび込んで行くのである。アイクの牝牛に対する愛について、Melvin Backmanは、“But it is the devotion rather than the heroism that makes Ike Snopes the truest lover in the novel. . . . Only in an idiot's passion has Faulkner found an unbrutalized and uncorrupted love, as if the idiot represented a state of nature.”⁶⁾と述べているが、この指摘の通り、アイクは純粹に牝牛を愛しているのである。

このでき事があってから、アイクと牝牛の愛は深まっていくと考えられる。ヒューストンに見つかってどなられたりしても、アイクの牝牛に対する思いはたち切られることはない。はじめは牝牛は乳房をアイクに触らせようとしませんが、やがてアイクは牝牛の乳首を吸い、牝牛のえさの入ったかごの中から、牝牛が食べる物と同じ物を食べるようになる。アイクと牝牛は一緒に泉のほとりへ行き、夜明けを迎える。彼は不器用な手で野生のひな菊をつみ、花の冠を作って牝牛にかぶせてやろうとするが、うまく作ることができず、花の冠はこわれてしまう。アイクと牝牛は一緒に野原ですごした後、夕暮れの太陽の光をあびながら、共に歩いて丘を下って泉のほとりへ行き、宵の明星が出るころ、彼らは一緒に寝そべて愛し合うのだが、その部分の描写はきわめて詩的で、象徴的である：

There is the one fierce evening star, though almost at once the marching constellations mesh and gear and wheel strongly on. Blond too in that gathering last of light, she owns no dimension against the lambent and undimensional grass. But she is there, solid amid the abstract earth. He walks lightly upon it, returning, treading lightly that frail inextricable canopy of the subterrene slumber — Helen and the bishops, the kings and the graceless seraphim. When he reaches her, she has already begun to lie down — first the forequarters, then the hinder ones, lowering herself in two distinct stages into the spent ebb of evening, nestling back into the nest-form of sleep, the mammalian attar. They lie down together. (p. 186)

さて、ジャック・ヒューストンと妻の間の愛はどんなものであろうか。ヒューストンと妻のルーシー (Lucy) は、子供の頃、同じ田舎の学校へ通っていたが、先に相手を意識し始めたのはヒューストンであった。しかし、積極的な態度をとったのはルーシーの方であり、彼女は落第をくり返すヒューストンを進級させようとして、彼の白紙の答案にひそかに答えを書き入れ、満点をとらせようとしたのであった。彼女のおせっかいに腹を立てたヒューストンは、家をとび出して13年間よその土地で暮らす。その間の7年間は、かつて売春婦であった女と同棲し、彼女が妊娠すれば結婚してもよいという関係にまでなる、家を出てから12年目に、自分が逃れ

ることができないと感じた未来を受け入れるために、同棲していた女と突然別れて故郷に帰り、ルーシーと結婚するのである。ところが、結婚してから6ヶ月後に、彼が彼女のために買ったともいえる種馬に殺されるという形で、ルーシーが死んでしまう。ヒューストンは種馬を撃ち殺し、その後4年間彼女のことを悲しみ続ける。ルーシーは美人ではなかったが、家庭的であり、“an infinite capacity for constancy and devotion”(p. 205)を持った女性であった。それは、ヒューストンを進級させようとする彼女の行動にも表われていたと言える。ヒューストンは13年間家から出ていたが、結局ルーシーと結婚したのであるから、心の奥では彼女にひかれていたと考えられる。また、ヒューストンが結婚生活6ヶ月で彼女を失った悲しみがきわめて深かったことから考えて、ヒューストンと妻ルーシーの間には、深い愛情があったと言わざるをえない。

次に、ミンク・スノープスと妻の場合を考えてみたいと思う。ミンクは彼女の父親の木材伐採の会社で働いていた時に、はじめて彼女に会った。彼女は父親と混血の女との間に生まれた娘で、両親の住んでいる家の一部ではあるが、入口が別についている離れ部屋に住んでいて、そこで働いている男たちを呼び出しては交わり合うといった生活をしてきた。ミンクが呼び出されて彼女の部屋へ入って行く時は、“not the hot and quenchless bed of a barren and lecherous woman, but the fierce simple cave of a lioness”(p. 238)に入って行ったのであった。彼女の父親の会社が倒産し、彼女とミンクは結婚するが、彼女は、ミンクに向かって“I’ve had a hundred men, but I never had a wasp before. That stuff comes out of you is rank poison. It’s too hot. It burns itself and my seed both up. It’ll never make a kid.”(p. 238)と言う激しい女である。3年後に初めの子供ができ、5年後に二人目の子供ができて、ミンクはすっかり夫らしくなり、今では妻を殴るほどである。ミンクがヒューストンを殺し、追われる身になると、妻は彼に逃げてほしいと言う。売春をしてもうけた10ドルをミンクに渡し、隠れていてくれと頼む。Cleanth Brooksも、“Theirs is a relationship apparently founded upon pure passion・・・”と述べているように、ミンクと妻の間には純粋な情熱があると言える。結婚する前は、激しさのみが前面に出ていた彼女であるが、ミンクの妻になり子供もいる現在は、夫を助けたいという思いの人一倍強い女になっているのである。

ジャック・ヒューストン夫妻の愛とミンク・スノープス夫妻の愛は、それぞれ少しずつ異ってはいるが、共通しているのは、女性の方が積極的であったことである。これにユーラとマックキャロンの関係を重ねてみると、マックキャロンを守ろうとして若者たちにとびかかったユーラの一面が、共通する点として浮かんでくるのである。

IV

ユーラとラボーヴの関係、ユーラとマンキャロンの関係をまず最初にながめてみたわけであるが、ラボーヴもマックキャロンも、ユーラの豊かな肉体から生まれる魅力のとりこになり、彼女に対して欲望は感じるが、ラボーヴの場合は obsessive な欲望で、彼の方からの一方的なものであり、マックキャロンの場合は自分勝手な欲望であって、彼の方に純粋な本当の愛があったとは考えられない。

白痴のアイクと牝牛の場合は、自分の名前も言えないような知的レベルのアイクではあっても、牝牛に対する思いは純粋であり、火の中から牝牛を救おうとする彼の行動の背景には、純粋な愛が存在するのである。そして、その純粋な愛がある故に、アイクと牝牛は心を通わせることができ、牝牛はアイクの愛に答えると言える。また、たとえ人間と牝牛の愛という形では

あっても、ユーラに対するラボーヴやマッキァロンの愛のない欲望が描かれあとで、あのような牧歌的雰囲気の中で純粋な愛が描かれていることは、読む者の心をなごませてくれるような気がするのである。

ヒューストンとミンクの二組の夫婦の愛は、それぞれ異ってはいるが、いずれも純粋な面を持っており、そこで積極的な役割を担っているのは妻の方である。考えてみれば、ユーラもマッキァロンのために若者たちにとびかかっていたのであり、ユーラの側には純粋なものがあったといえる。こうして見ると、純粋な愛において、女性の果たす役割は大きいと言わざるを得ないのである。

註

- 1) Olga W. Vickery, *The Novels of William Faulkner : A Critical Interpretation*, rev. ed. (Baton Rouge : Louisiana State University Press, 1964), p. 167.
- 2) William Faulkner, *The Hamlet* (New York : Random House, 1964), p. 95. 以下テキストからの引用は全てこの版によるものとし、引用箇所後の括弧内にそのページを記す。
- 3) Sally R. Page, *Faulkner's Women : Characterization and Meaning* (Deland : Everett/Edwards, 1972), p. 164.
- 4) Cleanth Brooks, *William Faulkner : The Yoknapatawpha Country* (New Haven : Yale University Press, 1963), p. 172.
- 5) Brooks, p. 176.
- 6) Melvin Backman, *Faulkner : The Major Years : A Critical Study* (Bloomington : Indiana University Press, 1966), p. 150.
- 7) Brooks, p. 178.